

# スポーツ・リテラシー研究への一視角

## —スポーツに対する価値意識とスポーツ観との関連から—

中島 憲子<sup>1)</sup> 海野 勇三<sup>2)</sup> 村末 勇介<sup>3)</sup>  
 鐘ヶ江 淳一<sup>4)</sup> 口野 隆史<sup>5)</sup>

### A Viewpoint at Research of Sport Literacy: Relevance Between a Sense of Value Regarding Sports and View of Sports

Noriko Nakashima<sup>1)</sup> Yuzo Unno<sup>2)</sup> Yusuke Murasue<sup>3)</sup>  
 Junichi Kanegae<sup>4)</sup> Takashi Kuchino<sup>5)</sup>  
 (2009年11月27日受理)

#### I. はじめに

今日、日々の生活において、スポーツに関する情報に接しないことのほうが稀なほど、スポーツは人々の生活に密接に関わるようになってきている。早川(2006)の言葉を借りれば「今やスポーツの話題が『おはよう』という、あいさつ代わりにされている」といわれるほどである。こうした状況は、本人が求めているにいかかわらず、メディアを通じてスポーツに関する情報が私たちの目や耳に飛び込んでくるようになったからである。

加えて、子どもたちのスポーツ文化との関わりにおいても、保育園・幼稚園での運動あそびや学校における体育授業あるいは運動部活動だけでなく、体育教室やスポーツ系お稽古事、地域のスポーツクラブなど、これまで以上に多様化してきている。とりわけ、スクール(習い事やお稽古事との関連)、スクリーン(テレビやビデオ、ゲームなどスクリーンとの関連)と並んで、スポーツ(習うスポーツとの関連)の三つの「ス」が、かつてなく子どもたちを取り巻くようになった(2009. 鐘ヶ江)。

ところで、「ス漬け」のひとつである子どもスポーツの隆盛は、ある意味で、子どもにとっての学校体育の相対的地位の低下、言い換えれば体育授業の有用性の低下を招く可能性を内在させていると考えられる。そのひとつは、スポーツ文化と出会う機会が学校の外側に広がっているということ(学校の内側以上に)、もう一つは、子どもたちはスポーツとの多様な関わりの中で、その経験内容に導かれ

ながら、一定のスポーツに対する価値意識やスポーツ観を育てるのであるが、スポーツ経験の場が多様化することは、必然的にスポーツに対する価値意識やスポーツ観形成に対する学校体育の作用(=教育力)が相対的に低下するということである。

体育授業の有用性とは、要約すれば、授業で学んだことや経験したことが、学習者からみて、普段の生活や将来の生活に役立つ(=生きてはたらく)かどうか、に関する主観的な見方のことである。したがって、仮に、いまを生きる子どもたちにとってスポーツと出会う機会が学校の外側に多様化したとしても、学校の内側の体育授業が彼らに対し、授業でしか得られない内容や経験を保証することができていたときには、体育授業に対する彼らの有用さの認知は低下することはないであろう。しかし、逆にもし学校の外側のほうが内側の授業より、多くの情報と経験(例えば、「する」「みる」「よむ」「ささえる」など)を得られるとすればどうであろうか。現在の学校体育は、教材という名の限定的な運動・スポーツだけを、しかも「プレイする」という限定的な経験だけを満たす場になってはいはしないだろうか。それが中学、高校における選択制授業によってますます拍車がかかる構造になっているのでないだろうか。率直に危惧の念を感じざるを得ない。

また海野ら(2006b)は、体育授業に関係する複合的な調査を実施し、日常生活スタイルと社会的スキルや心の健康といった子ども・青年の育ちの有りようを示す内容との間の相関的な分析・考察を行っている。その報告によれば、各調査カテ

別刷請求先：中島憲子，中村学園大学人間発達学部，〒814-0198 福岡市城南区別府 5-7-1

E-mail：nakasima@nakamura-u.ac.jp

1) 中村学園大学 2) 山口大学教育学部 3) 鹿児島市立伊敷台小学校 4) 近畿大学九州短期大学  
 5) 京都橘大学

リーの上位群は他の調査カテゴリーでも高得点を示し、逆に下位群は同様に他の調査カテゴリーにおいても、低得点を示すといった、いわゆる「二極化」現象を示していた。このことは、単に運動への興味や運動の実施頻度で格差の拡大傾向を示すことにとどまらず、学びと育ち全般に渡って双極化していることを示唆するものであった。また、鐘ヶ江ら（2005）は、子どものスポーツ関連のお稽古事・スポーツクラブおよび運動部活動への加入の有無と週当たりの参加度を元に調査対象の児童・生徒を三群に分けて分析を試みている。その結果、それらへの加入・参加度合いの高い群に属する子どもたちは、そうでない子どもたちよりも運動有能感や心の健康などの各調査カテゴリーにおいて高得点を示していた。加えて、学校外のいわゆる教育産業が提供するサービスを受益者負担で購入できる者とできない者、あるいは近年の競技志向とファッション志向で部活加入者の必要経費の高騰が指摘されるなか、それを負担できる者とそうでない者との間で、育ちの二極化現象が認められたとしている。このように「発達の二極化」現象（＝育ちそびれの全般化）は家庭の経済状況や文化資本の格差をも反映している可能性を示唆している。

そこで本研究では、子どもたちのスポーツに対する価値意識やスポーツ観がどのように形成されているのかを探りたいと考え、質問紙調査を実施した。具体的には、1) 今を生きる子どもたちはどのようなスポーツに対する価値意識をもち、どのようなスポーツ観を形成しているのか、2) それらは、学校の体育授業や運動部活動、テレビなどやメディアなどに影響された結果なのか、また3) それらが子どもたちのどのようなスポーツ観となって表出されるのか、について検討することを目的とした。

## II. 研究の方法

### 1. 調査対象および調査時期

2006年7月に、Y県の中学2,3年生、F県の高校2年生を対象に、各学校の体育授業担当教員の協力を得て、配布調査法による質問紙調査を行なった。その結果、中学生621名、高校生324名の質問紙を回収し、その後、調査項目に欠損値、誤記入などを除いた中学生544名（男子282名、女子262名）、高校生308名（男子160名、女子148名）を分析の対象者とした（有効回答90.2%）。

### 2. 調査内容

#### 1) 体育授業以外での組織的なスポーツ経験

基本的属性として、「年齢」「性別」「小学校期に

おけるスポーツ少年団所属経験と在籍期間」「中学校期における運動部活動所属経験と在籍期間」および「高校期における運動部活動所属経験と在籍期間」を尋ねた。

#### 2) 「スポーツに対する価値意識」および「スポーツ観」調査

本研究において、スポーツに対する価値意識とスポーツ観については、以下のように整理した。スポーツに対する価値意識とは、青木ら（2003）が示すように、「スポーツの社会的な意義と価値に対する主体（人々）の側の相対的な価値意識」であり、一つの文化に対する相対的な価値性を問うものとして位置づけられる。一方、スポーツ観については、大橋ら（1982）によれば「スポーツに対する考え、意義、目的」とし、日下ら（1989）は、「知識、意見、信条、観念等」として、より複雑で多次元的であるととらえている。また多々納（1988）は、「スポーツに関与する人々の態度」をスポーツ観とし、「価値意識」とは区別して捉えている。このように、スポーツ観とは、「主体がスポーツ実践に多様な形態で参加する際に、その行動を規定するスポーツに対する見方や感じ方」のことであり、先のスポーツに対する価値意識とは区別して整理した。これらの定義をもとに、以下に示す方法を用いて調査票を作成した。

スポーツに対する価値意識に関する調査については、青木（2003）によって作成された「スポーツ観測定項目（30項目）」を参考に用いた。この調査票は、スポーツの価値性因子（20項目）、スポーツマンの卓越性因子（4項目）、スポーツの非低俗性因子（6項目）で構成されているが、本調査では、調査対象者に対する負担を考慮し、各因子からスポーツの価値性因子（5項目）、スポーツマンの卓越性因子（3項目）、スポーツの非低俗性因子（3項目）、計11項目を「スポーツに対する価値意識」調査として作成した。なお、各質問項目は、「とてもそう思う：4点」「そう思う：3点」「そう思わない：2点」「まったくそう思わない：1点」からなる等間隔尺度を設定し、あてはまるものを回答してもらった。

スポーツ観に関する調査については、松尾（2001）、日下ら（1989）による先行研究におけるスポーツ観に関する項目群から、「スポーツに対する価値意識」調査と同様の手続きによって25項目を選定した。スポーツ観においても調査対象者に対する負担を考慮するために項目の選定を行った。なお各質問項目は、「スポーツに対する価値意識」に関する調査と同様に、1～4点の等間隔尺度を設

定し、あてはまるものを一つ選び回答してもらった。

以上の手続きを経て、「スポーツに対する価値意識」に関する調査の11項目、「スポーツ観」に関する調査の25項目、全36項目の質問項目を作成し、「スポーツに対する意識調査」として調査票を作成した。

### 3) スポーツに対するイメージに及ぼす影響力

スポーツに対する現在のイメージを持つに至った外部からの影響力について調査するために、「あなたが持っているスポーツのイメージや感じ方は何に影響を受けていますか」とする質問項目を設けた。「体育の授業」「テレビやマンガ・雑誌などのメディア」「運動部活動やおけいごと、クラブ」「友人・知人」の4つの中から強く影響を受けたと思う順位をそれぞれに記入してもらった。

### 3. 分析方法

分析にあたっては、スポーツに対する価値意識11項目において主因子法、バリマックス回転に基づく因子分析を行った。また、スポーツ観25項目においても、主因子法、バリマックス回転に基づく因子分析を行なった。加えて、因子構造の内的正当性を検討するために、クロンバックの $\alpha$ 係数を算出した。なお、これらの統計処理にはSPSS13.0Jを用いた。

### 4. スポーツに対する価値意識とスポーツ観の因子構造

スポーツに対する価値意識とスポーツ観に関する項目についてそれぞれ探索的因子分析を行った結果、因子の解釈可能性の観点から、因子負荷量の高い項目としてスポーツに対する価値意識から1因子9項目、スポーツ観から4因子16項目が抽出された。抽出された因子とその因子を構成する項目、及び因子負荷量と共通性を表1と表2にそれぞれ示し

た。スポーツに対する価値意識は、「スポーツは社会の中で高く評価されている」や「スポーツは日常生活を豊かにする大きな生きがいとなる」といったスポーツの持つ価値や生きがいに関する内容を示す項目であったため、「スポーツに対する価値意識」と命名した。またスポーツ観においては、第I因子は、「スポーツはいつでもやめられる気楽さをもって行うべきだ」や「スポーツでは、そのときそのときが愉快であればそれでよい」のようにスポーツに対する自己目的的な志向を示した項目で構成されており、「自己志向」因子と命名した。第II因子では、「相手チームの選手にヤジをとばしたり口ぎたなくののしるのはよくない」や「ドーピングをしてまで肉体改造をすることは、許されないことだ」などスポーツを実施するにあたってのルール厳守といった規律や規範意識を示した項目で構成されていたため「規範意識」因子と命名した。第III因子は「スポーツである限りは勝たねばならない」にみられるように勝利こそ価値といった志向を示しており「勝利志向」因子と命名した。最後に第IV因子は、「技術に関わらず、年上の者がチームでリーダーシップを発揮するのは当然だ」や「技能レベルが低くても、年上の人が選手に選ばれるのは当然だ」などスポーツを通じて他者との関わりを意識したものを示す項目で構成されていたため「人間関係」因子と命名・解釈した。

以上、スポーツに対する価値意識尺度、及び「自己志向」因子、「規範意識」因子、「勝利志向」因子、「人間関係」因子の4因子で構成されるスポーツ観尺度を作成した。

### 5. 信頼性および妥当性の検討

本研究における測定尺度の信頼性は、内的整合性による信頼性指数である信頼性係数（クロンバックの $\alpha$ 係数）を求めた。その結果、スポーツに対す

表1 スポーツに対する価値意識尺度の因子構造

No.	項目	因子負荷量	共通性
〔スポーツに対する価値意識 $\alpha = .81$ 〕			
31.	スポーツマンは何事もやり抜く根性がある人が多い	.62	.36
23.	スポーツは世界平和に貢献する	.61	.33
35.	スポーツは芸術作品と同じように人を感動させる力をもっている	.60	.37
1.	スポーツは日常生活を豊かにする大きな生きがいとなる	.59	.35
30.	スポーツは人間形成に欠かせない	.59	.36
12.	スポーツは社会の中で高く評価されている	.57	.33
2.	スポーツマンには決断力のある人が多い	.57	.25
13.	スポーツマンにはリーダーシップの能力が高い人が多い	.49	.39
14.	スポーツは単なる暇つぶしである (R)	-.45	.21

表2 スポーツ観尺度の因子構造

No.	項 目	因子負荷量				共通性
		I	II	III	IV	
〔I：自己志向 $\alpha = .58$ 〕						
20.	スポーツはいつでもやめられる気楽さをもって行うべきだ	.58	-.17	-.08	.08	.21
32.	スポーツではそのときそのときが愉快であればそれでよい	.56	-.09	-.12	.13	.38
27.	チームの勝利のためであっても、自分は犠牲になりたくない	.43	-.03	-.07	-.03	.35
28.	スポーツ選手は自分を活かすためにはチームの移籍などを積極的に 行ってよい	.38	-.11	.05	-.06	.16
34.	誤審が起こるくらいなら、審判をすべて最新機器で行ったほうがよい	.38	.01	.10	.00	.16
〔II：規範意識 $\alpha = .56$ 〕						
24.	相手チームの選手にヤジをとばしたり口ぎたなくののしるのはよくない	-.00	.62	-.02	.00	.27
29.	ドーピングをしてまで肉体改造をすることは、許されないことだ	-.05	.46	-.09	-.07	.26
36.	スポーツではあいさつや言葉づかいなどを大切にすべきである	-.22	.45	.16	.06	.23
11.	スポーツでは、勝つためにルールを破ってファールをしてもかまわない (R)	.18	-.43	.20	.08	.38
〔III：勝利志向 $\alpha = .48$ 〕						
16.	スポーツである限り、勝負には勝たねばならない	-.04	.05	.49	.05	.18
6.	スポーツでは、倒れるほど練習することが大切である	-.37	-.10	.48	-.03	.28
4.	監督、コーチや上級生が、チームを強くするために体罰を加えることは許される	.03	-.15	.40	-.01	.25
15.	監督やコーチの命令にはメンバーは全面的にしたがうべきだ	-.06	.27	.39	.22	.24
〔IV：人間関係 $\alpha = .43$ 〕						
21.	技術に関わらず、年上の者がチームでリーダーシップを発揮するのは当然だ	-.01	.04	.15	.66	.29
33.	技能レベルが低くても、年上の人が選手に選ばれるのは当然だ	.25	-.10	.01	.42	.47
3.	年齢の上下に関わらず技術の優れている者が、チームでリーダーシップを発揮するのは当然だ (R)	.22	.07	.29	-.39	.25

る価値意識因子では、 $\alpha = .81$ を示し、高い水準で信頼性を有していた。また、スポーツ観尺度における4因子における $\alpha$ 係数は、0.58~0.43と高い信頼性は得ることができなかった。このことから、スポーツ観尺度については、項目の再設定やラベル確認を行う必要がある。その点については今後の課題として再検討を要するが、本研究においては、抽出された各因子をスポーツ観の下位カテゴリーと位置づけ、自己志向性5項目、規範意識4項目、勝利志向4項目、人間関係3項目の項目群として取り扱い、カテゴリーごとの平均値で分析と考察を行うこととした。

### III. 結果と考察

#### 1. スポーツ少年団・運動部活動在籍状況

まず、今回の調査対象者となった中・高校生の運動部活動やスポーツ少年団（以下、スポ少と記す）との関わりについて所属の有無を表3に示した。中学生、高校生ともに、男子では約9割、女子では約

表3 スポーツ少年団・運動部活動在籍状況

		無所属	スポ少	運動部活動	スポ少+運動部活動
中学生	男子 (n=282)	11 (3.9)	6 (2.1)	91 (32.3)	174 (61.7)
	女子 (n=262)	70 (26.7)	14 (5.4)	107 (40.8)	71 (27.1)
高校生	男子 (n=160)	12 (7.5)	5 (3.1)	76 (47.5)	67 (41.9)
	女子 (n=148)	47 (31.8)	5 (3.4)	76 (51.3)	20 (13.5)

( ) カッコ内は%

7割が運動部活動やスポ少の経験が認められた。この結果は、スポーツ白書(2006)に示された状況とほぼ同様の結果を示していた。他方、どちらの所属も経験しない「無所属」の割合は、中学生、高校生いずれにおいても女子で約3割の生徒が組織的スポーツ活動経験を持たないまま過ごしている、という注目すべき傾向が認められた。

次に、彼らの組織的スポーツ活動への在籍期間を表4に示した。なおこの在籍期間は小学校期のスポ少所属期間、および中学校期・高校期の運動部活動の在籍期間を合計したものである。また所属階梯から始めた運動部活動に所属した年数も併せて区別した。

中学生の男子では、全体のうち48.2%が7年以上在籍しており、中学の運動部活動経験プラス4年間以上のスポ少経験者が半数を占めていた。また中学校期の運動部活動所属に1～3年間のスポ少経験を加えると、中学男子の全体の約8割が組織的スポーツ活動へ参加していることになる。これに対し、女子においては、中学校期の運動部活動所属に加えて4年間以上のスポ少経験者は全体の約15%、そこへ1～3年間のスポ少経験を含まると、全体の約55%が組織的スポーツ活動を行っていることがわかった。

また、中学入学と同時に始めて運動部活動へ参加する割合は男子で12.8%、女子で17.2%、高校

入学後にはじめて運動部活動に参加する生徒は男子で3.7%、女子で4.7%であった。この結果から、多くの生徒が小学校期から組織的スポーツ活動経験をもって中学・高校の運動部活動に参加している実態が伺える。見方を変えると、小学校期に組織的スポーツ活動経験を持たない生徒が、中学・高校に入学してから運動部活動に参加するケースはごく少数であるといつてよい。

## 2. スポーツに対する価値意識およびスポーツ観の実態

### 1) 男女別の実態

スポーツに対する価値意識およびスポーツ観における男女別の平均値を表5に示した。まず、スポーツに対する価値意識では、中学の男子が中学の女子よりもスポーツに対する文化的価値を認めている割合が高くなっていた。高校においては男女別平均値に有意な差は認められなかった。次に、スポーツ観では、中学・高校ともに「規範意識」カテゴリーが他のカテゴリーに比べて相対的に高い得点を示していた。また男女間では、「規範意識」カテゴリーにおいて、中学・高校ともに女子の方が高く、「自己志向」カテゴリーでは高校の女子で高くなっていた。また「勝利志向」カテゴリー、「人間関係」カテゴリーでは、中学で女子より男子の方が高かった。江刺(1982)における「スポーツの勝敗に対する固執度」の結果においても、男子が女子よりも勝敗にこだわりがちであるといった同様の結果を報告していた。

これらの結果から、中学・高校の女子生徒においては、スポーツの文化的価値に対する意識は男子よりも低く、勝利にはこだわらず、スポーツへの参加や離脱にもこだわらない。また、上下関係や年功序列といった人間関係に対しては、男子に比して女子に緩い傾向が読み取れた。裏を返せば、仲間や友だ

表4 組織的スポーツ活動の在籍期間

所属	無所属	スポ少のみ		所属階梯の運動部活動のみ		スポ少+運動部活動	
		0年	1～3年	1～3年	4～6年	7年以上	7年以上
中学生	男子 (n=282)	11 (3.9)	1 (0.3)	36 (12.8)	98 (34.8)	136 (48.2)	
	女子 (n=262)	70 (26.7)	5 (1.9)	45 (17.2)	104 (39.7)	38 (14.5)	
高校生	男子 (n=160)	12 (7.5)	0 (0.0)	6 (3.7)	55 (34.4)	87 (54.4)	
	女子 (n=148)	47 (31.8)	1 (0.6)	7 (4.7)	55 (37.2)	38 (25.7)	

( ) カッコ内は%

表5 スポーツに対する価値意識およびスポーツ観における男女別平均値

		中学生		t 値	高校生		t 値	
		平均	(SD)		平均	(SD)		
スポーツに対する価値意識 (9～36点)	男女	28.31	(4.41)	-2.63**	27.58	(4.27)	.70	
		27.37	(3.91)		27.90	(3.74)		
スポーツ観	自己志向 (5～20点)	男	10.90	(2.69)	1.62	11.28	(2.21)	2.28*
		女	11.25	(2.32)		11.82	(1.96)	
	規範意識 (4～16点)	男	14.11	(1.96)	3.12**	13.89	(1.76)	3.27**
		女	14.58	(1.54)		14.51	(1.57)	
	勝利志向 (4～16点)	男	9.37	(2.06)	-2.69**	9.11	(1.98)	-1.07
		女	8.90	(2.03)		8.89	(1.63)	
	人間関係 (3～12点)	男	6.93	(1.80)	-2.19*	6.63	(1.59)	-.48
		女	6.61	(1.64)		6.54	(1.54)	

(\*p<.05, \*\*p<.01)

ちへの配慮を強く意識しているとも捉えられるであろう。一方で、ルールやマナーを守ることへの意識は男子よりも高い傾向を示していた。

**2) 運動部活動・スポーツ少年団所属経験別にみた実態**

青木ら(2003)の研究によれば、運動部活所属群と無所属群との間には、所属群の方が、価値意識やスポーツ観で有意に高い傾向がみられること、スポ少所属の参加頻度によっても、様々な活動に対して意欲や関心が高い、とする結果が報告されている。また金崎ら(1995)は、スポーツへの傾倒、執着、結びつき、あるいはスポーツ行動やスポーツ集団、組織などに自分自身を投入することをスポー

ツ・コミットメントと定義した上で尺度を開発し、その尺度を用いてスポーツ・コミットメントのレベルとスポーツ行動について興味深い報告がある。ここでは、コミットメントの測定に「学校の体育の授業を通じての知人・友人を除いて調査したもの」と断りを加えた上で、スポーツ・コミットメントのレベルが低い方から高い方になるにつれて、「スポーツの実施頻度」や「スポーツの重要度得点」および「スポーツのための時間」など設定項目のほぼすべてにおいて高得点化しており、スポーツへの投入傾向が強ければ、スポーツとの結びつきが深いことを示していた。そこで本研究結果(表6)をみてみると、先行研究と同様に、中学男子、中学女子、高校男子でスポーツに対する価値意識は、無所属群よりも所属群の方が高くなる傾向が認められた。

**表6 スポーツ少年団・運動部活動所属別にみたスポーツに対する価値意識平均得点**

		1) 無所属	2) 運動部活動	3) 運動部活動・スポ少	主効果 F 値	多重比較 5%
中学生	男子	24.4 (3.6)	26.9 (4.4)	29.3 (4.2)	14.70 ***	3>2>1
	女子	25.2 (3.8)	27.9 (3.6)	28.5 (3.7)	17.70 ***	3>2>1
高校生	男子	23.0 (6.9)	26.7 (3.8)	29.3 (3.3)	16.87 ***	3>2>1
	女子	27.3 (3.2)	28.3 (4.0)	27.8 (4.0)	1.00	

(\*\*\* p < .001) ( ) カッコ内は SD

また表7には、スポーツ観の各カテゴリー別に平均値を示した。その結果、小学校期にスポ少経験をもった中学生・高校生は、男子で「勝利志向」カテゴリーで得点が高いのに対して、女子ではその傾向が認められなかった。一方、「人間関係」カテゴリーをみると、女子は無所属群より所属群で有意に高くなる傾向を示したのに対し、男子にはそのような傾向は認められなかった。

**3. スポーツ価値意識およびスポーツ観形成に作用する要因**

**1) スポーツに対するイメージに及ぼす影響力**

次に、スポーツへの価値意識やスポーツ観の形成にとって、組織的スポーツ活動経験以外にどのよう

**表7 スポーツ少年団・運動部活動所属別にみたスポーツ観平均得点 (上段：男子, 下段：女子)**

カテゴリー	1) 無所属		2) 運動部活動		3) 運動部活動・スポ少		主効果・F 値	多重比較 5%	
	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)			
中学生	自己志向	12.0	(2.9)	11.3	(2.7)	10.6	(2.6)	3.22*	1>3
		11.5	(2.0)	11.0	(2.5)	11.3	(2.3)	1.09	
	規範意識	13.7	(2.7)	14.1	(1.9)	14.1	(2.0)	0.22	
		14.5	(1.3)	14.6	(1.4)	14.7	(1.9)	0.13	
	勝利志向	8.3	(1.2)	9.1	(2.0)	9.6	(2.1)	3.60*	3・2>1
		8.5	(2.1)	9.1	(1.9)	9.0	(2.1)	1.88	
人間関係	6.2	(2.1)	6.9	(1.5)	7.0	(1.9)	1.19	3・2>1	
	5.9	(1.7)	6.8	(1.3)	6.9	(1.8)	9.27***		
高校生	自己志向	12.2	(1.2)	11.7	(1.8)	10.8	(2.6)	4.28*	1・2>3
		12.0	(2.3)	12.0	(1.7)	11.1	(2.1)	2.47	
	規範意識	13.6	(2.2)	13.8	(1.8)	14.1	(1.6)	0.82	
		14.8	(1.1)	14.3	(1.8)	14.7	(1.4)	1.91	
	勝利志向	8.1	(2.5)	9.0	(1.9)	9.4	(2.0)	2.70	3>1
		8.9	(1.4)	8.9	(1.6)	8.9	(2.1)	0.01	
	人間関係	6.1	(1.4)	6.6	(1.6)	6.7	(1.7)	0.78	3・2>1
		6.0	(1.5)	6.8	(1.2)	6.9	(1.9)	5.38**	

\*p<.05 \*\*\*p<.001

なところから影響があるのか、スポーツに対するイメージや感じ方に及ぼす影響力について質問した項目から考察してみたい。

調査では、「体育の授業」「テレビ・メディア」「部活・クラブ」「友人・知人」の4項目のうち、強く影響を受けたと思うものから順位づけしてもらった。さらに、1位には4点、2位には3点、3位には2点、4位には1点と得点化し、今回の調査対象となった中高生にとって影響力の高いものから示したものが表8である。中学生では、男女ともに組織的スポーツ活動経験のない生徒にとっては「テレビ・メディア」の影響が最も強く、次いで「体育の授業」「友人・知人」となっていた。また、組織的スポーツ活動経験者は、最も影響を受けるものが「部活・クラブ」、次いで「テレビ・メディア」に依存しており、以下「友人・知人」、そして「体育の授業」という順であった。

高校生をみてみると、組織的スポーツ活動経験のない生徒にとっては、中学生と同様「テレビ・メディア」に最も影響を受けていた一方、「体育の授業」は組織的スポーツ活動経験の有無に関係なく、どの群においてもほぼ4位に位置していた。

ところで、組織的スポーツ経験のない中学・高校生にとっては、いずれもスポーツの情報源は「テレビ・メディア」となっていたが、注目すべきは、

中学生で男女ともに、「テレビ・メディア」の次に「体育の授業」をあげていたことである。このことから、中学校の段階では、組織的スポーツ活動経験のない生徒にとっての「体育の授業」は、まだスポーツに対するイメージに及ぼす影響力があると捉えられ、さらに体育教師の指導性の発揮の如何によってはスポーツへの価値意識を高め得る場として寄与する可能性があると期待できるであろう。この点で、高校の段階では、中学校期よりも困難であることが推察される。

しかしながら、先に指摘した組織的スポーツ活動経験のない生徒はある生徒より「スポーツに対する価値意識は低かった」という結果と重ね合わせてみたとき、少なくとも影響力のある「体育の授業」は、スポーツの持つ文化的価値への意識を高められる可能性を秘めているといえる。しかし、実際の体育授業では、スポーツのもつ文化的価値・スポーツのすばらしさを伝え切れていないのではないかと推察される。同様に、彼らの期待に添うことができなかった教授—学習経験の蓄積が、高校期の無所属群の「体育の授業」を第4位に置かした背景にあるように推察される。

## 2) 影響を受けた群別にみたスポーツに対する価値意識の実態

ここでは、先の結果にもあったように、スポーツ

表8 スポーツに対するイメージに及ぼす影響力

階梯	性	所属期間	1 位	2 位	3 位	4 位
中学生	男子	0年	TV・メディア	体育の授業 友人・知人	部活・クラブ	友人・知人
		1～3年	部活・クラブ	TV・メディア	体育の授業	友人・知人
		4～6年	部活・クラブ	TV・メディア	友人・知人	体育の授業
		7年～	部活・クラブ	TV・メディア	友人・知人	体育の授業
	女子	0年	TV・メディア	体育の授業	友人・知人	部活・クラブ
		1～3年	部活・クラブ	TV・メディア	友人・知人	体育の授業
		4～6年	部活・クラブ	TV・メディア	友人・知人	体育の授業
		7年～	部活・クラブ	友人・知人	TV・メディア	体育の授業
階梯	性	所属期間	1 位	2 位	3 位	4 位
高校生	男子	0年	TV・メディア	部活・クラブ	友人・知人	体育の授業
		1～3年	部活・クラブ	TV・メディア	友人・知人	体育の授業
		4～6年	部活・クラブ	TV・メディア	友人・知人	体育の授業
		7年～	部活・クラブ	TV・メディア	友人・知人	体育の授業
	女子	0年	TV・メディア	友人・知人	部活・クラブ	体育の授業
		1～3年	TV・メディア	部活・クラブ	体育の授業	友人・知人
		4～6年	部活・クラブ	TV・メディア	友人・知人	体育の授業
		7年～	部活・クラブ	友人・知人	TV・メディア	体育の授業

に対するイメージに及ぼす影響力が、高校生よりも限定されていない中学生を対象に、中学生のもつスポーツ観は一体何によって裏づけされているのかについて探索的に探してみたい。

まず、スポーツに対するイメージ形成へ影響を受けた1位に回答した各群別に、スポーツに対する価値意識を考察してみたい(表9)。これまでの考察では、運動部活動など、組織的スポーツ経験のある生徒の価値意識が高いことはすでに述べたが、新たに男女別に平均値を比較してみると、男女間での有意な差が認められたのは、「テレビ・メディア」を1位とした中学生の価値意識であった。つまり、メディアからの情報がスポーツに対するイメージ形成に影響が強いと答えた中学生において、男女間で価値意識が異なってくるということを示している。

そこで以下では、スポーツのイメージや考え方に影響を与えたものとして、「テレビ・メディア」と「体育の授業」を1位にあげた中学生の価値意識を比較・検討した。「テレビ・メディア」を1位にあげた中学生のスポーツに対する価値意識を男女間で比較したものが図1である。ここでは、「スポーツは芸術作品と同じように人を感動する力をもっている」は男女ともに相対的に高い値を示している。しかし女子においては、スポーツの「生きがい」や「人間形成」に対する機能や「社会(の中での)評価」に関わった得点が、男子に比べて有意に低かった。

さらに、「体育の授業」を1位にあげた中学生の価値意識を示した図2からは、スポーツの「生きがい」に対する機能において、女子が有意に低い値を示したものの、その他の項目では男子と同様に高い値を示していた。

一方、女子のみにおいて、各項目の平均値を「テレビ・メディア」と「体育の授業」間で比較したところ、「社会(の中での)評価」項目において、「テ

表9 スポーツに対する価値意識得点(影響1位別)

1位		平均	(SD)	t値
体育の授業	男	26.4	(3.9)	0.15
	女	26.3	(4.4)	
TV・メディア	男	28.2	(4.5)	3.15**
	女	26.1	(3.3)	
部活・クラブ	男	28.8	(4.0)	0.53
	女	28.5	(3.8)	
友人・知人	男	27.2	(5.9)	0.88
	女	26.1	(4.0)	

\*\* p < .01

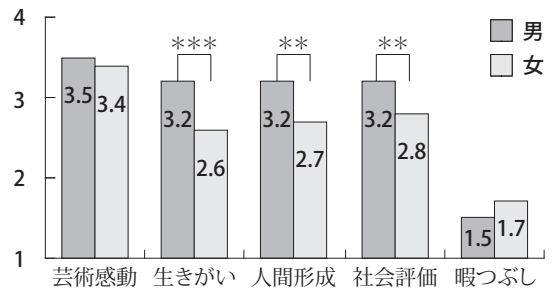


図1 「テレビ・メディア」を1位とした中学生のスポーツに対する価値意識の項目別男女別平均得点

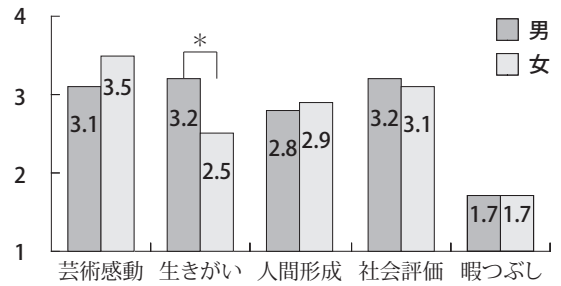


図2 「体育の授業」を1位とした中学生のスポーツに対する価値意識の項目別男女別平均得点

レビ・メディア」を1位に答えた女子中学生(平均2.8, SD:0.8)よりも、「体育の授業」を1位と答えた女子中学生(平均3.1, SD:0.5)の方が、5%水準で有意に高い値を示していた。

このことは、日々流されるメディアからのスポーツに関する情報に対して、疑念を抱くことなく吸収するか否かによって、時には誤ったままのスポーツに関する知識や認識、鑑賞や評価などを生じさせ、彼らの価値意識が形成されていく可能性をも示唆するものと考えられ、体育授業におけるスポーツに関するメディア・リテラシー形成の必要性を問いかけていると理解することもできよう。

### 3) 影響を受けた群別にみたスポーツ観の実態

先の考察では、スポーツのイメージや考え方に影響を与えたものの違いによって異なったスポーツの価値意識が形成されていることが示唆された。そこで、以下では、スポーツ観においても同様にスポーツのイメージや考え方に影響を与えたものとして、「体育の授業」「テレビ・メディア」をそれぞれ1位にあげた中学生のスポーツ観を男女間で比較していきたい。

「体育の授業」を1位にあげた中学生のスポーツ観の分析結果(図3)からは、「勝負である限り勝たねばならない」(勝利志向)、「年上の者のリー



ダーシップ」(人間関係)の項目で、女子は男子に比して有意に低い値を示した。一方、「テレビ・メディア」から影響を受けた中学生の分析結果(図4)からは、「勝利志向」カテゴリーに関する項目において「体育の授業」を1位とした女子の得点よりも高かったこと、有意差は認められないものの男子よりも高い値を示したことが示唆された。ここでも先に指摘したものと同様に、体育授業におけるメディア・リテラシー形成の必要性が示唆されているように思われる。

以上のことから、中学生のもつスポーツに対するイメージや感じ方に対して影響する力が何であれ、相対的にスポーツは人を感動する力を持っている得点は高かった。しかしながら、スポーツが日常生活を豊かにする上で大きな生きがいとなることや人間形成にはスポーツが欠かせない点といったスポーツに対する価値意識の違いは、影響を受けた環境や男女によっても違いが生じることが明らかとなった。つまり、どこから何によって最も影響を受けたかによって、勝負に対するこだわり方が変わってくるし、人に気を配れるかどうか、人間関係性にも影響を及ぼすなど、スポーツ観の形成のされ方に差異が生じてくる。加えて、そのことによって、それぞれ

のスポーツに対する価値意識へと影響していることが認められた。

最後に、もっとも影響を受けたと答えた1位の回答別に中学生の運動部活動やスポーツ少年団などの人数を所属別に表10に示した。「体育の授業」、「テレビ・メディア」、「友人・知人」に1位と回答した生徒は、部活所属群、スポ少経験群、両方なし群とそれぞれ均等に存在していた。順位に違いはあるものの、運動部活動やスポーツ少年団に所属していたとしても、「体育の授業」に最も影響を受けたと答えた生徒も含まれていることを確認しておきたい。

#### IV. まとめと今後の課題

以上のような調査結果から、三つのことを指摘できるであろう。まず一点目は、先行研究でも指摘されてきたように、本調査においても運動部活動やスポーツ少年団など、組織的スポーツ経験のある生徒とそうでない生徒との間には、「スポーツに対する価値意識」「スポーツ観」いずれにおいても差異が認められたこと。二点目は、学校における「体育の授業」のスポーツ観形成への影響力がほかの要因に比べて相対的に低いことが示唆された。加えて、この影響を受けた順位には、中学生と高校生との間に違いがみられたこと。最後に三点目として、スポーツに対するイメージ形成に対して最も影響を受けたものが何であっても、また男女の違いによっても、スポーツに対する価値意識やスポーツ観の形成に違いがみられ、スポーツ観の形成がなされることがわかった。

これらの結果から、体育の授業に限らず、個性的なスポーツ経験というものが中学生や高校生のスポーツに対する価値意識やスポーツ観を形成していることは明白である。したがって、膨大なスポーツ情報やニュースに対して、すべてを取り込むだけではなく、それらの情報を批判的に捉えることによって、スポーツ情報を取捨選択しながらスポーツ文化

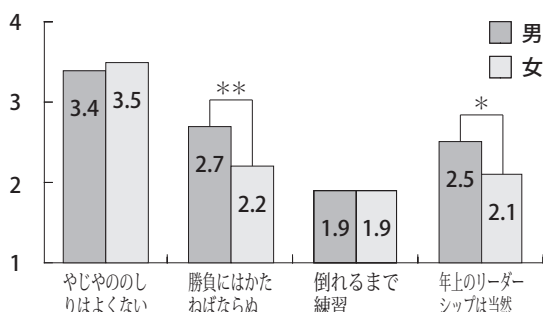


図3 「体育の授業」を1位とした中学生のスポーツ観の項目別男女別平均得点

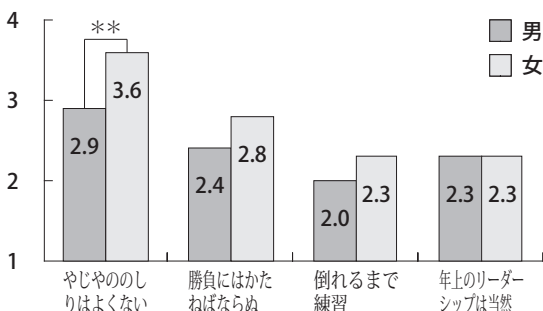


図4 「テレビ・メディア」を1位とした中学生のスポーツ観の項目別男女別平均得点

表10 1位の回答別にみた中学生の部活・スポ少所属数

1位	無所属	運動部活動	運動部活動・スポ少	計
体育の授業	24 (42.9)	22 (39.2)	10 (17.9)	56 (100)
テレビ・メディア	68 (30.4)	78 (34.8)	78 (34.8)	224 (100)
友人・知人	23 (24.7)	29 (31.2)	41 (44.1)	93 (100)

と関わっていく力、言い換えれば、黒川・海野ら(2006, 2006a)が提起する「スポーツ・リテラシー」概念<sup>註)</sup>から、これまでの学校体育のありかたを問い直すことが求められていると考える。

本研究を通じて、スポーツのグローバルゼーション、メディアスポーツの発展・肥大化、他方で学校体育・スポーツにおける教育力(教育可能性)の相対的比重の低下が進行するもとの、子ども・青年のスポーツに対する価値意識およびスポーツ観がどのような在り様をしているのかについて明らかにしていくための基礎的資料を得ることができた。今後は「スポーツ観」測定尺度の作成に取り組むとともに、それをを用いながら、体育授業で批判的リテラシーを育む上で今何ができるのか、また今何をすべきかについて検討する必要がある。今後の課題としたい。

### <注>

黒川・海野ら(2006・2006a)はスポーツ・リテラシーの概念を整理する中で、スポーツ・リテラシーの内包を、「主体(個人及び集団)がスポーツ実践に多様な形態で参加し、その過程における経験をスポーツ文化に関する知を活用しながら批判的(critical)に分析・鑑賞・評価し、スポーツ・コミュニケーションを創り出す(創造)能力」とし、その外延には「① スポーツに関する知識・概念、技能、② スポーツに関する知識・概念、技能を獲得する方法、または獲得した知識・概念、技能を現実のスポーツの分析・鑑賞・評価に適用するスキル、③ スポーツに対する価値意識・態度(意欲・興味を含む)」といった三つの要素から構成されていることを示している。

### <引用・参考文献>

- 青木邦男(2003)高校運動部員のスポーツ観とそれに関連する要因, 体育学研究48:207-223.  
 江刺正吾(1982)スポーツ参与の社会化にみられる性差の検討ー児童・生徒・学生のスポーツ意識と行動を中心にー, 体育・スポーツ社会学研究1, 137-160.  
 早川武彦(2006)メディアスポーツ. 高津勝ほか編, 越境するスポーツ, 創文企画:東京, pp.45-73.  
 金崎良三・橋本公雄(1995)青少年のスポーツ・コミットメントの形成とスポーツ行動の継続化に

関する研究:中学生・高校生を対象に, 体育学研究39(5), 363-376.

鐘ヶ江淳一(2009)「ス漬けの生活」でのあそびの変質, 学校体育研究同志会編, みんなが輝く体育①幼児期, 運動遊びの進め方, 創文企画:東京, pp.18-19.

鐘ヶ江淳一ほか(2005)中学校期の体育授業改革と教育課程づくりの課題(1)ー運動有能観・社会的スキル・心の健康をめぐるー, 日本体育学会第56回大会発表資料, つくば市.

黒川哲也ほか(2006)スポーツ・リテラシーに関する基礎的研究(2)ーリテラシー・モデルの比較分析ー, スポーツ教育学研究第26回大会号:26.

日下裕弘, 丸山富雄(1989)一般成人のスポーツ観に関する研究, 体育・スポーツ社会学研究7, 131-158.

松尾哲矢(2001)スポーツ競技者養成の《場》とハビトゥス形成:学校運動部と民間スポーツクラブに着目して, 体育学研究46:569-586.

大橋美勝・徳永敏文(1982)日本人のスポーツ観についてー多様性とその変化ー, 体育・スポーツ社会学研究1, 19-37.

SSF 笹川スポーツ財団(2006)スポーツ白書, 第3章スポーツクラブ, SSF 笹川スポーツ財団:東京, pp.58-76.

多々納秀雄(1988)スポーツ活動の実態と価値意識に関する国際比較研究(1)ー「日本的スポーツ」論の認識論的・方法論的諸課題ー, 健康科学10, 91-101.

上杉正幸(1990)スポーツ価値意識のパターンとその関連要因の分析ー一流競技参与者と地域スポーツ参与者の比較ー, 体育・スポーツ社会学研究9, 1-21.

海野勇三(2006a)スポーツ・リテラシーに関する基礎的研究(1)ーその構造的把握と新概念を定義する意味ー, 九州体育・スポーツ学研究21(1), 15.

海野勇三(2006b)東アジア地域における子ども・青年の体力, 健康, スポーツ・リテラシーおよび生活スタイルに関する国際比較研究, 平成17~19年度科学研究費基盤研究B(年次報告書第1年次), pp.103-120.

### 付記

本研究は、東アジア地域におけるスポーツ・リテラシー形成に関する国際比較研究(研究代表者:海野勇三, 基盤研究B, 課題番号:17300196)の助成を受けて実施された研究の一部である。